

2018年度  
非文字資料研究センター  
第4回公開研究会

中国 文化大革命を振り返る——日本人はどう受けとめたのか

日時：2019年2月2日（土） 13：00～18：00

場所：神奈川大学横浜キャンパス3号館405号室

プログラム

司会：孫安石（神奈川大学教授）

記録映画上映—文革初期の毛沢東と紅衛兵

解説：長井暁（ジャーナリスト）

報告：大里浩秋（神奈川大学名誉教授）

「文革に対する当初の反応—中国研究所を例として」

矢吹晋（横浜市立大学名誉教授）

「新島淳良編『毛沢東最高指示』について」

加々美光行（愛知大学名誉教授）

「半世紀を経て文化大革命とは何であったか—その歴史の再考の困難性」

馬場公彦（岩波書店編集局部長）

「世界革命としての文化大革命—要因・衝撃・悲劇の国際的連鎖」

コメント：菊池敏夫（神奈川大学特任教授）



報告

大里浩秋（神奈川大学名誉教授）

はじめに

この公開研究会を開ききっかけとなった文化大革命（以下、文革）のポスター入手とそれを展示するに至る経過を記す。数年前になるが、筆者は三重県の山岸会に保存されていると聞く新島淳良氏（1928～2002）所蔵の本を拝見しに現地に伺ったことがあった。そして、夫人里子さんの許しを得て一室に置かれた本の山を拝見したが、めぼしい本は見当たらなかった。それもそのはず、新島氏が早稲田大学を退職されてから40年余が経ち、その間にこれぞという本は誰かが持ち去ったはずだと納得したところ、里子さんが、私がふだん詰めている部屋に新島がいろんなところで集めたポスター類がありますよとおっしゃって見せてくださった中に、文革初期に中国で入手したポスター類があり、それは200枚を超える数であった。その内容の確認もそこそこに頂けるものなら頂きたいと申し出て、里子さんの快諾を得、梱包や郵送は山岸会の方をお願いをして、思ってもみなかったポスター類を頂けることに興奮しながらお暇した次第。

大学に戻ってからは、非文字資料研究センターの職員と相談して、もともと複数枚をくるくる丸めていくつか

の束にして置いてあったポスターの中身を1枚ずつチェックして登録した後、専門の業者に依頼してしわを伸ばし保存に耐える消毒を施してもらい（そのために必要な経費を大学に認めて出してもらい）、3年余を経て新品同様になったポスターを公開展示する条件が整ったことから、そのうちの20枚ほどを選んでひと月余展示するとともに、そのうちの一日はシンポジウムを開いて、50余年前に起こり、日本にもさまざまな影響を及ぼした文革を振り返り、さらにその後の中国の状況や日中関係の推移についても考える機会を持ちたいと考えた。



写真1 ポスター展示の様子



## 文革ポスターの展示

「文化大革命ポスター展示(新島淳良氏寄贈コレクション)」と題する文革ポスターの展示は、横浜キャンパス図書館展示コーナーで2019年1月15日から2月25日まで実施した。展示内容はポスターにとどまらず、文革当時訪中した複数の人が入手した毛沢東語録や毛沢東バッジ、紅衛兵の腕章等のいわゆる文革グッズ、当時中国及び日本で発行された文革関連の出版物や新聞の切り抜き等を多くの方の協力を得て展示に加えることができた。おかげで、学内外からたくさんの人が展示を見に来てくださり、文革を知らない世代の人(中国からの留学生を含む)にも興味がわくような展示が実現したのではないかと思う。さらに、新島里子さんにご子息雄高さんにお越しいただきゆっくりご覧になっていただくことができたのは幸いであった。

## 公開研究会(以下、シンポジウム)の報告



孫安石氏

小熊誠氏

最初に、小熊誠非文字資料研究センター センター長の挨拶があり、次に大里浩秋による趣旨説明があった後、上記の順に報告が行われた。以下、コメント部分を菊池が執筆した他は、大里が執筆した。

## 長井暁 「文革初期の毛沢東と紅衛兵」



長井暁氏

記録映画「毛沢東的百万文化革命軍在一起」(中央新聞記録電影片廠、1966年9月、40分)を上映しつつ、その映画製作の背景などに解説を加えるものであった。この映画は1966年8月18日に北京天安門前広場で開催された文革を祝う百万人集会の様子を記録したもので、紅衛兵が登

場して毛沢東が初めて彼らを接見し、林彪と周恩来が演説する姿を収める、文革最初期の注目すべき映像である。長井氏が指摘したことであるが、天安門前の集会の様子にとどまらず、全国数か所でスピーカーから流れる天安門前の演説を聴きながらそれへの支持を表明する人々の様子も記録されているなど、周到的準備を経て文革がのろしを上げたことを実感する内容になっていて、そこでの若者の毛沢東に対する熱狂的な崇拜ぶりが印象に残った。

## 大里浩秋 「文革に対する当初の反応—中国研究所を例として」



大里浩秋(筆者)

戦後まもなく(1946年)、戦時中の中国侵略の事実を防ぐことができなかった、あるいは自らもそれに加担したと反省する人々によって創立された中国研究所(以下、中研)という一民間組織がその後に取り組んだ活動を振り返るとともに、創立20年後に起こった文革から受けた影響について語る

ものであった。まず大里は、中研は中国をはじめとするアジア諸国に与えた侵略戦争の被害を十分に反省しないままに戦後をスタートさせた日本政府に批判的な立場を採りつつ、戦前の間違った中国研究を克服することをめざし、1949年に建国した中華人民共和国との友好交流に努めつつ、中国建国後の実情を理解すべく研究に励んだ経緯を語った。その意味で中研は、戦後の中国研究のみか日中関係を良好なものにするための取り組みにおいても、それをリードする役割を果たしたといえるものの、他方中国の現状理解においては、冷静に研究する視点に欠けている面があり、「50年代には、何かというとすぐ中国はこうだ、それに学べという風潮が圧倒的だった」とする当事者の回想を紹介する。

そして、1960年代になり文革が起こると、それへの対応が二分されて分裂騒動に発展し、中研にとどまった人たちは文革・毛沢東思想礼賛に極度に傾くことになり、そのころの中研内部の文革支持ぶりを紹介しながら、その後遺症は文革終結後もしばらく続いたとし、中国支持の社会的活動と冷静な研究との間で保つべき距離を置かなかったことが手痛い教訓として残ったとする。

## 矢吹晋 「新島淳良編『毛沢東最高指示』について」



矢吹晋氏

矢吹氏は、まず新島淳良氏の経歴を、魯迅や中国教育史を研究した人物であると紹介した後、文革に対して全面的礼賛の立場を採って果敢な論陣を張ったが、文革の否定面が明らかになるにつれて文革に懐疑的になり、さらに公表しない約束で提供された毛沢東の内部

論文集を『毛沢東最高指示—プロレタリア文化大革命期の発言』として公刊したことが中国側から反中国分子として批判されたと紹介する。続いて、私は新島氏から毛沢東思想を学んだとし、その経緯として、第一高等学校で新島氏の同学だった岡田裕之法政大学名誉教授が法政在職中に自らの研究室で開いていた「社会主義経済研究会」に参加した際、岡田氏から新島氏の所説についてしばしばコメントを求められ、つまり私は岡田氏を通じて新島氏の見解を知り刺激を受けることになったとする。

そして現代史のifとして、「新島教授がもし現代中国論の講義を続け後進の養成に力を尽くしたならば、日本の中国研究がここまで混迷に陥ることはなかったのではないか」と述べ、ついで矢吹氏自身の体験として、1960年代に出版されていた『毛沢東思想万歳』に収録されている「ソ連政治経済学読書ノート」を翻訳して『毛沢東 政治経済学を語る』を1974年に出版した際に、反中国分子のレッテルを貼られ、その後何度か中国行きを拒否されたことに触れて、新島氏が『毛沢東最高指示…』を出した時と同様の扱いを受けたことを紹介し、それでもなお中国研究を続けて曲りなりにも中国との関係を維持してきたことをいくつかの例を挙げて語った。

## 加々美光行 「半世紀を経て文化大革命とは何であったか—その歴史の再考の困難性」

加々美氏は、1960年代後半は各国各所で反米反戦を叫ぶ青年の反乱が相次ぎ、中国の文革も時期的にはこの全世界の青年の反乱と軌を一にしているとし、「なぜそうした反乱は同時多発的にかつ比較的的青年世代に集中して起きたのか？また新島はなぜ文革を当初肯定かつ礼賛的に評価したのか？新島は文革終了後否定的かつ断罪的に文革を評価し直しただけにこの問いは彼の思想の軌跡を知るうえで重要である」と前置きし、「集

团的国家的主体性か諸個人間の間主体性か」という問いの下、次のように述べる。

1965年以降「ベトナム」という言葉が国際的に「カリスマ」性を強くしていったが、ベトナム戦争が終結して言葉のカリスマ性が消えると同時に、「集団の衣を脱いで裸になった人々の人間主体性の問題を浮き彫りにさせた」とし、それまでの全世界の運動が集団であることを重視し、個人と個人の「間主体性」を見過していることが十分には理解されてこなかったとする。毛沢東についていえば、1930年代に中国共産党の根拠地を延安に置いた時期から「主観能動性」を強調しているが、それは集団的階級的な主体を前提にしていて、間主体性は「個人主義」であると曲解して否定し、その曲解は文革になっても変わらなかったと述べる。そして報告の最後で、私が文革を基本的に肯定していると批判する人がいるが、それは間違いである、私は文革を常に忘却しないという立場を採っており、それは日本が戦前戦中の誤りを忘却してならないことと同列であると述べる。[加々美氏は体調不良で欠席されたので、本人が用意した原稿を大里が代読した]

## 馬場公彦 「世界革命としての文化大革命—要因・衝撃・悲劇の国際的連鎖」



馬場公彦氏

馬場氏はまず、1950年代のバンドン会議などを通じて培った中国のインドネシアとの関係が、1960年代になってインドネシア共産党が中国共産党寄りの武装闘争路線に転換し、1965年には陸軍内でクーデター（9.30運動）を起こして失敗したことで、インドネシア全土で共産主義者狩りをさ

れるとともに華僑華人が弾圧される事態となり、それにより中国が国際的孤立化を深めたことが文革発動の一つの要因になったと指摘する。さらに、政策の失敗から国家主席の座を劉少奇に譲っていたことで党内の実権派を恨み権力奪還を狙っていた毛沢東は、インドネシア9.30運動の失敗も踏まえて人民戦争をやるしかないことと決意し、階級闘争をかなめとするプロレタリア人民の国際連帯をめざして起死回生の文革を発動したとする。

そして、共産党内の非主流派を結集し党外の大衆勢力を扇動・動員して地方から中央に向けて宣戦布告して権力内部のクーデターに成功し、文革は植民地状態に置かれた抑圧された民族人民にとって民族解放運動のモデル



になり、その衝撃は世界各地に影響を及ぼすことになった。日本向けにも日本革命を呼び掛ける文が新聞に発表されたことがあり、日本人の中にも文革の理想化や誤読が起こったし、そのころ盛り上がった学生運動では文革でしきりに語られた「造反有理」が主張されたりしたが、その影響力は長くは続かなかったとし、文革の当初に毛沢東の引き立て役を任じた林彪が1971年に毛に反抗して自滅する事件を起こしたことが伝わると、学术界の文革支持者が沈黙する事態となり、日本以外でも文革の陶醉感や醒め、世界革命としての文革の火は消えたとする。

## コメント

菊池敏夫（神奈川大学特任教授）



菊池敏夫氏

長井さん提供の映像は臨場感も豊かに文革初期の熱狂を再現したもので、貴重な体験となった。拝見しながら、さまざまな感慨が脳裏をよぎったが、その中には恐怖感もあった。

大里さんの報告は、中研や善隣会館における出来事を時系列的に追いながら、文革を「日本人はどう受けとめたのか」、その真相に迫ろうとしたもので、今回のシンポの趣旨に沿ったものであった。1966年の日共と中共の対立以後、日本における文革の影響は政治、友好協会、企業、学生運動、研究者等々と広く及んだが、その一端が公平で、リアリティーのある報告によって分かりやすく理解できた。

加々美さんは個人と個人の間主体性の問題を議論した。1940年代の毛には間主体性と個人主体性の相違が見えておらず、集団的、階級的な主体性しか見えていなかったが、それはマルクス主義者も同じであった。1970～80年代、カリスマの弱体化に伴い間主体性が注目され、また「東西対立」に代わって「南北対立」＝貧困問題が出現した。そして間主体性こそがこの問題を解決する運動の姿であるという考えを提示した。

矢吹さんは、自らが師と仰ぐ新島淳良氏から毛思想を学んだ歴史について熱を込めて報告された。1966年以降、新島氏が文革礼賛の立場で果敢な論陣を張った様子や、矢吹さんが新島氏と一高で同学であった岡田裕之氏らと共同研究に勤しんだ様子が詳細に紹介された。当時の文革研究の現場からの報告であった。

馬場さんの報告は、近著『世界史のなかの文化大革命』

と一部重複する内容であった。インドネシアの9.30クーデターの失敗によって中国が第三世界、国際社会で孤立するところから文革が始まり「世界革命」へと突き進む姿が紹介された。この報告は、文革を中国の外側から再検証した点に大きな特徴があり、文革研究の最新の到達点を示すものである。

全体として、政治、思想関係の報告が主で、経済や民生方面に乏しい感があった。文革が新中国の経済建設の方法をめぐる権力闘争でもあった点を考えれば、よりバランスのとれた構成・議論が欲しかった。また、新島氏が文革の結果に懐疑的となり、早大を辞職したことに氏の研究者としての誠意を改めて感じた。

## あとがきに代えて

今回報告して下さった方について、大里（以下、私）が主観に傾いたご紹介をする。矢吹氏は私の尊敬する先輩で、文革発生時には大学を卒業しており、まもなく文革を含む現代中国に関する論評を次々に公にされてきた。加々美氏は私とほぼ同年で大学在学中に文革に出会ったのだが、そのころは沈黙しておられたようで、しばらくしてから思索に富む文革をはじめとする中国論を展開して注目されてきた。私はといえば、よくは分からない事件だと感じつつも文革が発するエネルギーに圧倒されて当時の大学闘争で「造反有理」を叫んだことがあるが、その後は中国近代史や日中関係史を研究するものの、文革について発言することはなかった。馬場氏は1958年生まれだから文革に関わる個人の記憶はないだろうが、その分というか、その後の出版社での編集や調査研究を生かして先人による中国研究を検証する作業を進め、文革についても新鮮な視点からの論を展開されている。

この4人の報告者は、それぞれに体験や研究にもとづき、文革を日本人はどう受けとめたのか、というシンポジウムのタイトルを踏まえて報告されたことになる。そして、私のこのつたない文を、加々美氏の報告にあった「私は文革を常に忘却しないという立場を採っており、それは日本が戦前戦中の誤りを忘却してならないことと同列であると述べる」を借りて、結びとしたい。



シンポジウムの様子